

乳幼児期における自己および他者理解の発達（４）

－母子相互作用における母子の応答性と自他理解の関連－

○常田秀子（東洋大学）・遠藤利彦（聖心女子大学）・坂上裕子（東京大学）
保崎路子（お茶の水女子大学）・無藤隆（お茶の水女子大学）

【問題と目的】

他者との日常的な相互作用において、自他の伝達行動が的確に機能し、相手からの応答が得られたり相手に応答したりする経験は、乳幼児のどのような自他理解によって支えられ、彼らのそれ以降の自他理解にどのような影響を与えるだろうか。常田ら（1996 教心ほか）は、12,18 か月における乳児の自他理解が 18 か月時の母子相互作用における両者の応答性の間に関連があることを見出した。本研究では、その結果も踏まえ、18,24 か月の自他理解と相互作用における応答性との関連について検討する。

【方法】

被験者：男児 17 名、女児 14 名とその母親。

時期：子どもが 18 か月および 24 か月時。

手続き：①自己および他者理解に関する実験：報告(1)で既述。②玩具を用いた母子相互作用場面（報告(1)で既述）から 5 分間を抽出し、そこで見られた母子の伝達行動について以下の観点から分析した。

1. 発信数(子・母)：子ども・母親がそれぞれ相手に対して行ったやりとり始発行動の頻度。
2. 応答性(子・母)：相手のやりとり始発行動に対して、子ども・母親それぞれが何らかの応答を行った割合。
3. ターン数：一続きのテーマにそって連続した伝達行動の往復数の平均値。

【結果と考察】

1. 18 か月の自他理解と 24 か月の母子の応答

性の関連：18 か月の自己の発動主体性の理解と 24 か月のターン数の間に弱い正の相関が見られた。18 か月に自己の発動主体性についての複雑な知識を持っている子どもは、24 か月になると母親との間でより長くやり取りを続けられるようになることが示された。一方、18 か月に自己の発動主体性および母の客体的特徴と 24 か月の母応答性の間に弱い負の相関がみられ、18 か月により低レベルの自己の発動主体性・母の客体的特徴しか理解できない子どもに対して、24 か月には母親がより応答的にかかわっていることが示唆された。

2. 18 か月の母子の応答性と 24 か月の自他理解の関連：18 か月の母親の応答性と 24 か月の自己および母親の発動主体性の理解との間に正の相関がみられ、18 か月時に母親が高い応答性を示す場合ほど、24 か月時における自他の発動主体性についての理解が複雑であることが示された。

3. 18,24 か月それぞれにおける自他理解と応答性の関連：18 か月では、自己の発動主体性と子の応答性、24 か月では、自己および母親の発動主体性と子の応答性との間に正の相関がみられた。発動主体性についてより複雑な理解を持つ子どもは、母子相互作用の中で、母親からの伝達行動に対してより応答的であること、あるいは、母親が子どもの応答を引き出すような相互作用を行っていることが示唆された。

総じて、母子相互作用場面の応答性は、自他理解のうちの発動主体性の側面と強い関連があることが示された。

表 1 自己理解と母子相互交渉における応答性

	18か月			24か月		
	子応答性	母応答性	ターン数	子応答性	母応答性	ターン数
18か月						
自己発動主体	0.45**	-0.15	-0.08	0.19	-0.33	0.33*
母発動主体	0.22	0.02	-0.12	0.18	-0.25	0.04
自己客体的特徴	0.06	0.03	0.05	0.12	-0.25	0.27
母客体的特徴	0.07	0.12	0.15	0.17	-0.37	-0.03
24か月						
自己発動主体	0.25	0.44**	0.10	0.51**	-0.02	0.20
母発動主体	0.10	0.37*	0.40**	0.42**	0.18	0.20
自己客体的特徴	0.28	0.28	-0.13	0.23	-0.10	0.04
母客体的特徴	0.25	0.28	0.08	0.22	-0.07	-0.13

*p<.10, **p<.05